特41
939

205130-001-6

特41-939

慶応水滸伝（落花清風）

柳亭　種彦／著

上

M22

EDV-0137

侍41
939
W2/4884

序

水滸の一百八賊に忠義の名を貧しゝより以來義博の稱へ起りて近世博徒の團結掠屠殺を旨となす事蹟を記えてい。水滸傳を下すもの寡からず。北總の清力富五郎が籠し金毘羅山を梁山泊に擬して。天保水滸傳と唱へ。常州の國貞忠治が履歴を嘉永水滸傳といふが如き。もの是なり今や予が著す。小金井の小二郎と。淺草の辰五郎が事蹟へ。弘化の初年より。明治維新の際に渉れど其關

目とする所を以て。慶應水滸傳とゝ題し畧。雖爾小二郎辰五郎にゝ。賊に等き惡行なきゆゑ。各天壽を全ふして。俠客の芳名を遺す最も愉快の談柄なれども世に埋沒ふ伏魔殿。知る人もなき豪傑の。傳記を訂きて四方に走らす。拙き戯墨の小説も。御愛顧を蒙りて。金聖歎が御評判に。預らむ事を偏に冀ふ

明治壬午夏夜

柳亭種彦錄

落花流風慶應水滸傳

第一回

柳亭種彦著

漢書ニ曰く意合ば則ち胡越も昆弟たりと爰ニ説く博徒等が義を以て交際を厚くし一團結しく俠任の意を磨く巨魁の江戸近在ニ蜂起せしゝ文政天保の頃より嘉永安政の間を盛とす就中江戸淺草あゐ新門の辰五郎と兄弟の義を結びて徳川氏の回復を謀らんとせし小二郎ハ武州多摩郡鴨下村小金井の郷ニ代々正里を務る門閥の豪農鴨下勘右兵衛が次男なれ抑此鴨下氏ハ本性を鴨と稱し其祖先ハ足利義輝の侍臣ニして關播磨守重政といへりしが其子勝重の代ニ民間ニ下り此地ニ來りて鴨下を姓とし徳川將軍家綱公の時同地を開墾せ玄川崎平左衛門と共に小金井橋の上下玉川上水の兩岸へ數千樹れ櫻を植るニ盡力し艶陽滿香なる花と等しく其名芳しき重政が九世の孫勘右衛門ニ二個の子ありて長男を虎之助といひ次男を小二郎といふ此小二郎ハ幼き時より性質豁達なる故に農業を嫌ひ賭博を好み能く其術ニ熟練して未だ十二歳の角髪のころ父勘右衛門が手許金十有餘圓を攫み去て賭博の趣ニ携へ行皆悉く失ひしを父勘右衛門ハ疾くも聞知り小二郎を捕へ來りて行ひれ正しらぬを呵責し兄を視る事親ふ若ゆと我倩々汝を視るニ生涯農事を營みて田野に朽果べき面魂ひならず望むハ武士か商人か汝が欲ゆる所に任せん何等の業を目途とゆるやと問ゆ小二郎うなだれし頭をあげて莞爾と笑ひ武士と成も願ハしからず又商人と成も否あり我ハ博徒の巨魁と稱されん事を望むといふニゆ父勘右衛門大ニ歎息し三ツ兒の魂ひ百まで丶やらん幼少ながら一

心の決定したる上なれば異見を加ふるとも詮なからん我ハ今より汝を棄て意のまゝ放ち遣べし然れども父が今日離別の際に向來を誡め置べき一言あり賭博の黨ふ入ることも他人の財を强奪し賊の汚名を遺す事なく信義の二字を忘却せず温和ふ人と交る可と戒め諭せば小二郎ハ唯今父の教訓ハ生涯忘れじと誓て詫ひ去んとすれバ母ハ小二郎が幼年にて贈の太きふ呆れて歎き只願父ふ詫入やと促し責れど小二郎ハ毫も聞入る氣色なく袂を拂て悠然と我住居を立退し剛邁不敵ハ擧動を聞く者ハ皆肝を冷せと博徒ハ之を壯なりとし他郷に伴ひ行んといへば小二郎頭を打振て遠路へ走るを肯ぜゞ我行ひれ良からぬを以て父母ハ我を棄給へと我ハ老たる父母ハ許を遠く離るゝふ忍びずとて近村ふのみ吟行ぬるが天保四年小二郎が十六歳の秋のころ父勘右衛門ハ重症ふて殆と危篤の容躰なりと聞にしかは小二郎大ふ驚き憂ひ親しく父が病床に居て看護のならぬを歎き

桃園の義をちかひ豪傑の似るべくもあらねと
緋櫻の下にも
結ぶちぎり哉
種彦題

四

父勘右衛門の命數の盡べき時ろ養生叶はゞ終よ鬼籍よ入しかば小二郎の幼兒れ如く地に伏縛ひて聲をも惜まず歎き悲しむ光景の平素の强氣よ似もやらゞ涅槃の場よ金剛神の號哭ゞるがごとく成りしも扨あるべきよあらざれば兄虎之助もろともよ父が野邊の送りを濟し七々の佛事怠りなく喪もいづかしかに果けれゞ虎之助の家督を禪つぎ小二郎も此時より同家に住居したりしよ博徒の交際日に倍し常よ數十人の食客を養ひて親分と尊敬せられ雲貫くごとき丈夫も皆小二郎が下風に立て勢ひ近村よ振るひしかゞ兄虎之助の之を羨み遂よ賭博の群ふ入て等しく其名を讃かせり此兄弟の幼時より擊劍柔術なんどを好み小二郎は殊よ其技よ長じ力量もまた衆よ勝きて巨魁とゝへ豪傑と仰がるしが天保六年八月末に其黨谷保村の力藏あてたゞしく走り來り小二郎よ告て以へるやう今日堀端村の鈴木與三兵衛ゞ博賭場にて阿兄虎之助の利を失ひて衣服を投出し裸躰にてゝ歩行れれゞ家よ歸りて屆るよゞ衣服を暫く貸くれよと與三よ頼み聞えしゝど衣服を貸ぬのみならず却つて詈り辱しめ傍觀もるよ忍びねば我等が衣服を贖ひて舍兄を家よ歸らせたりと語る詞も終らざるよ小二郎ゝ身を起し剛へ立て行しまゝ暫くもれども出來らねば力藏ゝ不審を生じ小二郎どのゝ如何よせしやと家婢よ行方を尋ぬれゞ且那ゝ今しも納戸れ内より脇指を取出し腰よたばさみ飛が如くふ裏口より何れへか行しと聞て力藏ば大いよ驚き小二郎性來錯逆なれゞ兄虎之助が恥かゝされたる其復讐よ單身よて賭博の莚を驅がさば事の難儀よ及べしと足を飛せて引返へし堀端村へ到りて見れば相手ゝ遁て小二郎ゝ坐の中央よ憤然と刀を提携突立ゝるよゞ容子を聞ば小二郎ゝ突然と入來ゞ無法よしかけゞ口論に寡りて矢庭ふ與三兵衛よ傷の傷を負し

たれば與三は辛く虎口を脱れて何方への立去たりと語るを聞て力藏ハ小次郎を諫めていふ
やう兄貴が怒ハさる事ながら與三は子分も多けれバ再び衆を率て來らば兄貴ゑ三面六臂あ
りとも爭で敵する事を得ん危き場所に長居せず速かに立退れよと詞を盡して止むれど肯て
退べき氣色ゑく我今足下の詞に從ひ迂濶ふ此處を去る時ハ再擧を怖れて走しと後日に必ず
笑はるべければ其根を固免て歸らんとて遂に與三が義兄なる廻田村の榮太郎が家に至りて
顚末をのべ宿意の有無を問究むれば榮太郎は小次郎が雄威の逞しきに臆し盜てゐ恨ハ含ま
じとの答へを押て悠然と引退きて虎之助が恥辱を雪ぎし勇壯を聞傳へし徒は巨魁とたゝへ
下風につく者日に倍て名を關東に轟のせり

第二回

時に天保十一年未だ正月は中旬も過ねど寒も緩みて山々も笑ふ氣色と成れバ小次郎が義
兄なる府中の萬吉なる者來りて伊勢參宮より讃州の金毘羅詣に行ずやと誘引ふに任せて小
次郎は本年廿二才まで遠く他國へ出ず事なく世間知らずで在しかば此は屈竟の機會ゑりと
て乾兒一宮の政次郎を連ゆけバ萬吉も亦其乾兒馬五郎與三郎の兩個を具し素より急がぬ遊
歷なれば旅泊に娼妓を聘さぬ夜はなくもさゝて二月のハじめ勢州一身田に到り茶亭に腰
打かけて五人が休ゝふ其先に嚴然間敷く旅裝ひしたる武士十四五名が同じ床机に憩ふと間
もなく又もや五人の武夫と一個の婦人の入來しは皆一群の連と覺しく其婦人の年頃は廿才
の上を六ッ七ッ過ぎ容色頗る美しく殘花の匂ひ深きが如し髪は飾ゝず卷束ねて腰に短刀
を帶たる体は武士の妻とも見ゑさりけれバ小次郎意中に怪しみて萬吉が袖を密ひかへ渠等
は武士の如くに扮裝威氣揚々と往來すれど其實は博徒あらんと呟く言葉も終らざるに彼方
も何か叮嚀さて中に一個の大男が床机を離れて萬吉が前に來りていへるやう我は金山の幸助
とて聊か人ゑ知られたる博徒の端に列る者なり足下等五人も仲間の黨と確に見認て此後と
も知己ゑならんと思へり此ゑ來りし一行の巨魁ハ桐生の半兵衛とて上野國一圓の大貸元な
る事ハ更に言でも聞知り賜ハん其他は義弟國定忠次、幸崎の友五郎、白子の新七、桐生小僧
七五郎等にて婦人は半兵衛大哥が妾なり各々乾兒夥多を率て伊勢參宮に來りしに付て些魁の
み度一件あれど此席にハ發言し難し後國の藪へ來られよと萬吉を伴ひ行て時過ども出來
ねば小次郎ハ其憑合の隙どるを訝しみ茶亭の後に立廻り二個が語らふ容子を見れば萬吉
ハ手を組て頗る困苦の樣子なりしが漸くに首をもたげ據ろなきゑ頼みゐれど同行したる者
どもは何と返事をするやらん一聽相談して見んとすゝで立て來るを見て物陰より現れし
小次郎は萬吉が袖をひかへ幸助が依頼したる事の由を尋れば萬吉は頭を搔つゝ此大勢の博
徒等が旅中の資金の乏ぎき由にて我に逼つて懷中の旅費を殘りなく與へよといふく迷惑至
極の難題なり多勢の勇威に恐怖して是をゑめれめ取れなば一生涯の恥辱なりとを拒みて與
へざれば腕力を以て抗敵するとも衆寡いかでか及ぶべき寧一時の恥を忍びて渠が望に任す
るの外に思案ハあるまじと決定したりといふを聞て小次郎ハ勃然と拳を握つて立上り此ハ
また大哥の詞とも思れぬまで口惜き弱兒思案をきれさるものかな今日渠等ゑ靈中の物魂
七りなく奪れなば歸郷の後に誰か又親分大哥と敬尊ハんや此ハ我輩が死べき時の爰に至り
しものならん死べき時に死ざれど死るに增る恥なるべし爭で渠等に恐るべきやと萬吉を押

退て幸助が前に進み出毫も臆する氣色なく今しも大哥に言れし如く我儘聊か貯へあれども今日まで知己にもあらぬ兄等の爲にむさぼらるべき多勢に畏れて之を贈れば再び何の面目あつて博徒と人にいはるべき斯いふ言を聽れず强て要求せんとならば目前此場に血を洗ぎ屍を積で雌雄を決するまでなりと答へつゝ咄嗟討も懸りつべき凜然たる勢ひなれば案に相違の幸助が膽を冷して口籠りあたる後の方ふ最前より始終を立聞く國定忠次と小次郎が膽翠の並々ならぬを大に賞し我々眼ありながら此豪傑を知らずして虎威を犯せるハ過てり幸助も疾く詫ずやと無禮を謝して小二郎が手を携へ元の茶店の床机に誘ひ半兵衛等に引合せ酒肴を命じて宴を開き同志を語り愉快を盡し猶再會を約しつゝ右と左へ別れしかば万吉と小次郎等は計らず毒蛇の口を遁れて其日て同所に一泊し翌日内宮外宮を拜し古市の青樓に至り彼伊勢音頭を見むと望めて揚屋の亭主は心得て樓上の廣間に案内し用意大かた調ひければ囃子につれて踊出たる夥多の美人ハ旅中の眼を新に洗へど古市といふ廓の名の古風殘りて面白き酒宴の佳興ふ入る折から小二郎は萬吉にむかひ昨日ハ五人が屍をなゝべて道路に晒す愚悟なりしも今日は無上の歡樂を盡す身の上の計り難き者ハ博徒なゝずや死を極めさる危難を來すも身に貯へのある故なれば今夜此樓上ふて蠱を振つて散財せば却て氣安かるべしといへば万吉謂りて是より諸岐へ趣きて歸路までは行路も遠きふ今蠱中を振ひなば何を以て旅費に充んと詰れば小二郎微笑して大哥は其等ふ用心をるれど旅中の手當ハ如何とも我又金策すべければ敢て憂ふる事なかれと遂に貯へ二十餘圓を一夜のうちに抛ちて唯壹圓を殘し止め酒池肉林の娯樂を極め翌朝早く古市を立て奈良街道にさし懸り新田驛に止宿したる夜小次郎ハ眠ふつかんと厠へ至りて四邊を見れば苑を隔し小座敷ふ衆くの人の集りて囂々とうち語ふハ何をずるやと披足しつゝ障子の際間より覗きて見れば十八人の農商等が皆一群に圓居して盛に勝負を爭ひゐる其正面の二個こそ正しく博徒と見認れれば小次郎意中ふ喜びて密かふ座敷へ立戻り万吉に其事を語りて突然と勝負の莚に進入り我も賭奕を共にせんと望めは一同大に驚き敢て勝負を爭ハねば小二郎は正面なる博徒に對して本名を偽り我ハ飛彈の高山に住る吉五郎といふ者ぞと名乘れば彼は相州十日市場の惣次郎といふ者と名乘り互ひの口宜は聞れども圓居したりし人々は更に勝負を促さぞ引込思案の体なるにぞ此は妨をしたりしとて小二郎は其莚ろを退き再び居室に戻れば彼徒ハ後日の事を怕れて小二郎が許へ酒肴を贈れど小次郎これを固く辭し再三强れど受納せずして惣次郎が明朝の出立時限を尋ねれば明六時の發足と聞き夜具引かつぎて熟睡せしが寅の剌に起出て萬吉政次與三郎馬五郎を促し今曉少しく爲す事あれば速ふ發足せんとて忙はしく旅店を出一里ばかりも離れたる路傍の崖に憩ひつゝ明るを待ば万吉てまだ黑暗なる天を犯して此處に來りて明るを待は如何ある故ぞと詰問ば大哥が曩に心配されたる旅費ハ前晩面會した

水滸傳

る十日市場の惣次郎が曩中ふ有を以て斯く謀りしと聞く四人は奇策々々と賞贊して等しく手を打つ其折しも松明を振照しつゝ來れる强夫二人あるを小次郎は呼とめて莨の火を借なから奈良へ出べき山越の徑はなきやと尋ぬれば奈良へ至る本街道ハ十九里なれども間道ハ僅に九里に足ずといふにぞ我々は其間道を越んと思へば供に具したる此男を同行して賜はらずやと强夫に賴みて與三郎に其意を含ませ白紙を裂て路々の木の枝ふ結びつゝ路の

元

梁にすべしと命じ願夫に付て去しめし時に鷄鳴曉を告げ夜い朗かみ明にけれ

第三回

小次郎万吉馬五郎政次の四個は崖の邊に行て惣次郎の來るを俟うち夜い明放れて往來の人の陸續通行すれば便宜悪しと思ひねたるに已の刻過る頃に至り昨夜會たる十八人皆一群ゐ駄馬に乘來るを見れば一樣に笠深くして面も見ねねば小次郎は其連中を遣過して後にたつ馬を止めて此中に惣次郎はなきやと問ば彼者濁す事を得ず第一番目の馬に乘しが惣次郎ぞと答ふるにぞ喃々とよびかくれども馬士は頻に足を遇め走りて驛の内へ入れば小二郎は猶後を暮ひ驛の中央に至りて追つき我は昨晩知已に成たる高山の吉五郎なるが惣次郎巨魁に些頼を度事あれば乾兒の衆も一同に此茶店にて憩ひてよと請ふて馬より下しければ惣次郎は笠を脱頼みとあるは何事ぞといへば小次郎四邊を見廻し此往來の茶亭にてい説出がたき一件なれば裏手へ廻り木の陰にて逐一れ話ーまをさんと前日已が一身田ふて桐生の半兵衛國定忠次等ゐ無心されたる時の如く惣次郎と一名の博徒にむのひて扨いふやう恥かしけれども我々は長途の旅費に盡果て殆ど飢渇に逼らんとす七窮すれば盗を爲の惣はあれど誰なく他人の寶を掠むるい義もなく勇もなく業にて博徒の恥る所なれば如何にかせんと案じゐたるに幸ひみして同業の足下等に邂逅しは偏に天の助け成べし兩兄よろしく我が困難を察し旅費を貸てと賜はらずやと思ひ入て望まれければ惣次郎は小次郎が强氣に忽地拙しがれ迚を遁れぬ所と思ひ旅費の無心は承諾せしが我々とても旅人にて無數の貯へあるにあらねば差向何程入用なりやと問ば莞爾とうち笑ひ早速の承知恭なし我が望みは多少を謂せず兄

等二個が懷中の財布の儘ゐ悉とく借用せんと思ふのを之を承諾せられずは禍ひ瞬間に起んと返答如何にと烈しき詞に兩個は大に瞋を冷し遂に爭ふ事を得ず胴卷の儘四十餘圓の金を振ふて小次郎に渡ー涙と鼻を一ッに啜

りて我等は今日豪傑の爲に旅費殘なく奉りて歸郷の用意も既になし驚くと其情を憐れみ其内よりして貳圓の金を惠み賜へと低頭して頼めば小次郎うち笑つゝ惣次郎が胴卷より二圓を出して與ふる折から驛内ふてゝ小二郎が旅客の物を强奪する其談判を聞知りて代官役所へ訴ふべきか市中にて召捕んかとて東西に奔走し騷ぎ立ども小二郎ゝ悠然として恐るゝ色なく惣次郎のかたへを去ず四方山の話しまながら驛の中央へ來りつゝ同行十有餘名ふも皆百年の知己の如く叮嚀ふ別を告げ再會を契りなどして馬士を促し去し先て舊の茶店へ立戻しかゞ驛内の番人等も偖ゝ賊には非ざりけりと事故をも糺さず手を下ぎず圍を解て去けれゞ四人は此處を疾く走り彼間道ふ分入て與三郎が木に結付たる紙を栞ふ奈良ふ至れど容子如何にと待ねたる與三郎にも首尾能と示して旅店に酒宴を開き大和の名所古跡を遊覽し數日を經て大坂に至り諸方を見物したる後船ふ乘じて讃州の金毘羅へ參詣せんとて乘組たるし其晩より海上風波暴くして纜を解かたければ數日の間川口に碇泊したる船中の客は徒然に耐かねて密かふ賭博を催すを小二郎等ゝ始先より趣に入で傍觀するに盛ふ戰ふ連中に旅商人と見もる二個か多く勝利を得る光景ゝ千變万化奇々妙々いふ目の出ざる事なければ此兩人に敵する者なく一晝夜にして一同が蓄へ持たる金錢ゝ更なり遂にゝ衣服を估却して不足を償ふ迄に至るを吃かさる者なかりけり小次郎ゝ此時までも手を下さずしてゐたりしが衆くの旅客か困難を見るに忍びず其座へ出て商人めきさる二人ふ對ひ汝ゝ同船中の旅客を田父野人と侮りて狡猾の術を逞しふし衆の眼を眩惑すとも我が目は暗まし難かるべし今まで獲たる金錢を速に列なる人々に返!與へゞ免しもせんが忌と拒まば目のあさり兩人とも海中に投じ魚腹に葬り呉んずと勢ひ猛く詈れば二人は憶する景色なく勝負は時の運にして我が勝たりとも怪む理なく若また道に列れる衆くの客が勝ばとて我は恨みも歎きもせず他人の背を入らるゝ幕には非ずと空嘲きて冷笑へば小次郎も呵々と打笑ひ如何さま汝が言の如く眞の勝負ゝ運ふ因るべし汝は巧ふ贋造賽を用ひて他人の財を獵れは豈天運と云べけんや掠むるといふも認言ならじといへゞ二人と大ふ怒りて此は事可咲き寃罪かな我が持賽を怪しと思はゞ眼を開きて熟と見よと二個の賽を投出せばいふにや及ぶと手に採つゝ煙管を以て打碎き中を見れども疑ふ事なき眞の賽にて有ければ賭博に長し小次郎も呆れ惑ひて詞もなく默然としてゐたりしが再び二個の博徒に對ひ最前より此賽を以て勝負を挑む者あれば我も怪む所なけれども未た此外に怪しき賽を隱し持るふ相違なし汝等二個が旅行李より衣服の袂に至るまで悉く我に改めさせ然して後ふ此賽の外に所持する物なくば罪を免して得させんといへば相手は膝立直し此は面白ク言分かな何國の大哥か親方かは知ゝ紜ど他人の勝負をかたはらふ猥に口を出のみなゝず旅荷衣服に至るまで檢査させよと望まらるゝは公儀の役人なら知ゝず常の人ふは成難き望みなれども我々も痛からぬ腹を探らるゝが迷惑なれば眞正直なる面晴に行李も衣服も改めさせん然して怪き賽の出ずは大哥は二つなき首を我等貳個ふ渡さるゝや否やと迫れゞ小次郎ゝ我が此首を授けるか汝等二個を海中へ屠込かの二ッふ一ッ爭で違背のあるべきぞと約せば貳個は衣服を脱ぎ赤裸となり一重々々ふ小次郎に改めさすれば縫目の間に至るまで隈なく探せど賽てなしされば旅荷を見せよとて包の桐油とく〳〵と内を開けば着換の衣服その他は寶藥手帳の類のみ賽は甲斐くれ見えざれ

ば小次郎が疑團解ずして兩手を組つゝ考へゐるを兩個の博徒はしたり面に脫たる衣を身に纏ひ斯まで足下が望の如く改免させてとなき襲の船より湧べき道理もなけれバ貰ふて不用な首を繼ぐ贖罪金を出さずやと逼れば流石の小次郎も正しく夫と思へども眼前証を得ぬ事なれば兩個に詰り責られて頗る困難する折ゝ燈影に背きし後の方の溝暗き所より誰とも知ず小次郎が臂を密に叩く者あれば小次郎は訝りながら後の方へ手を廻し探りて見れば毛だらけなる足の大指に襲を狹み小次郎が手に渡すにぞ小次郎は手ごゝろに其重量をはかりて大ふ雀躍び再び兩個の博徒ふいへるは斯十分に探したれば疑ふ所なしと雖も今汝達が行李を開きて中なる品を改めしゑ菓子を入たる袋ありしを外より菓子と見認たれば中を開きて見ざりしが再び菓子を殘らなく此塲へ明て改めしうへいよ〳〵怪きさいの出ずば首まれ金まれ汝等が望に任せて罪を謝すべし再び菓子の袋を出して見せよと乞へば相手の兩個ハ呵々と打笑ひ其ハ又易き望みなり疑ひ深きも程にぞ寄る疑はしくは此菓子を一ッ〳〵に打碎き喰ふて眼き眼を覺し面を洗ふて能く見よと飽までに嘲弄して袋を出せば此時まで側へに聞ゐる萬吉ハ乞ゑ三人の乾兒も乘合の旅客も今や小二郎が正ー〳くさいの有まじき菓子の袋を穿鑿して如何なる椿事を引出すやと堅唾を呑で扣へゐさり

第四回

二個の博徒ハ旅荷の內より菓子袋を取出すを小二郎は手に受ながら最前誰やら足の指に狹みて贈し贋ざいを掌の間だに隱して袋の內へ投入わき滿座の中にて蠶を破れば內より出る菓子もろ共一個のさゝの現出さるにぞ皆一同に驚き呆る、中ふも相手の博徒二個は辨駁せ

んと立の、るを小次郎ハ慮て、さいを二ッに打碎た中に鉛を包たるにぞ小次郎は二個を白眼斯る怪き器械を所持して衆くの人を欺く奴等は後日の憂を除くため大魚の腹を肥し臭んと勢ひ猛く立上れば二個の博徒が面色ハ投入らるゝ水よりも蒼然て兩手を合せ命ばかりは助けて賜へと泣つゝ詫入る体を見て小次郎頻に打笑ひ斯る惡事を巧ながら此小次郎が首を望むハ傍腹痛き言狀かゐ飽まで懲しくれんと思へど前非を悔て此後とも斯る惡業を働かずハ命ハ免し得させんとて最前よりして掠めさる金錢殘りなく出させ旅客に割戻させれば乘合の者は異口同音に小二郎が義氣强きを賞ゑ只顧恩を謝するにぞ二個の博徒は船中に在に堪ずや小二郎等に暇を乞て上陸し立去たりし時もよゑ風波漸く靜まりて纜を解き讃州の丸龜港へ着船せり此時までも贋造ざいを小二郎に渡たる旅客ハ誰とも分らざるは尙數回の後にして其名を著ゑ時あるべー却訛く小二郎萬吉等ハ象頭山金毘羅ふ詣で歸路は京都の名所を見巡り祇園島原なんどに遊び路用大かた盡しかバ萬吉は所用ありて與三郎馬五郎を率ゐ中山道を下るふゞ小二郎は政次を連て東海道を下らんと大津の旅店に袂を別ち素よゞ急がぬ旅なれば十二三里を一日とし遂小駿州興津由井の間なる蒲陸嶺に差懸り蜂が澤の茶店に憩ひて富士の高根と伊豆の峠の景色を見れバ往昔足利尊氏兄弟が戰ひたりし跡ふ去て近世北條武田の鬪爭も此山岳に有しゑ聞ば武門に生れぬ身ながらも昔を忍ぶ折からに是も昔は武士の果ゞと思ふ浮涙士夫婦が身に垢染し藍褸を纏ひ小やかゐる水刀を帶し如何ふも旅泊に勞れゑと見もるが脊に負ひたりし幼兒の屬々泣は饑に逼りし光景あるにぞ小二郎は頻ゝ憐れを催ゑて茶屋の床机に請ひ休ませ泣兒に菓子など與つゝ困苦の次第を尋ぬれ

ば夫婦い共に涙にくれ斯零落て今更に名乗出るも恥かしながら我等い癒下の數ならよ小吏の次男あるが若年より怠惰にして酒に耽り色に溺れ親族共が異見をも馬耳東風に聞なして家に在る日も稀なれば遂には父母の愛を失ひ勘當されて行方なさに兼て密通しねたりし是なる妻を伴ひて上方筋を志ざし走去しい只今より四年以前の事なりしが夫より京都へ赴きて此許や彼許に奉公し辛く浮世を渡るうち此幼兒を設けしが彌々迫る貧窮に子を以て知る親の恩今さら不幸を悔れども詮方涙親と兒が六ッの袂を絞りつゝ幽けき煙を立ねたるに仄かに聞ば我兄い疾疫にて早世したれど老たる父の嗣子なければ唯我事のみいひ出て歸るを待さい子たらざる我を左までに愛しまるゝ慈心にはよ〳〵前非を悔悟し罪を詫人歸宅せんと有ほどもなき物掻集免て賣拂しを路用に充去年十二月下旬京都を立て下る途中三州吉田の驛に於て遽ふ手足腫痛み一歩も曳こと能ねば心にもなく旅館屋に七十餘日逗留し錢の代と宿料とふ僅ふ所持せし旅費はさらあり夫婦が衣服大小より小兒の小袖まで賣却し吉田の驛を立出つ往來の人の袖にすがり一文二文の施行を乞ひ夜は農家の軒ふ彳み雨露を凌てやう〳〵と此嶺まで來りたが今朝より親子三人が一粒の食もなさゞれば山路に身躰餓勞れ最早歩行もかないぬを夫婦は如何にも忍べども東西知らぬ幼兒の飢ふ苦しを泣聲は我ゞ胸も張裂ばかり眼も當られぬ困難を憐れみ給へと涙にくれ迭に語るを小次郎は聞つゝ大に憐れみて腹掛の懸しを探り金三兩を取出し我も旅客にあらざれば十分恵みもそべけれど歸鄉の路用も大ゝたい遣ひ盡し、上なれを甚だ瑣小の事なれども江戸まで下る路用ふい此三兩にて事足るべし受納られよと差出せば涙士夫婦は地ふひれ伏し何國の方かは知ふねども

思ひがけなき往來にて斯る恵みを賜いりし此大恩い生々世々忘る時いいなし尊名は何と名乘る、御仁なるぞと問かくれば旅中の奇遇ふ些をかりの物を參ふせたりとても恩とするにい足ざれば我名も言ず足下の名も聞で此儘別るべし日も西山に傾くに疾行さへと急がせて茶亭を出る裾引とめ我々夫婦が人並に世を渡る日もあるあらば再會の時此高恩い必ず酬ひ參ふせんと嬉し涙ふくれながふ小次郎が背影の見えず成まで伏拜を感ずる恩を報ふ日のありやなしやい數回の末を讀得て明らかなるべし

第五回

三略記に曰く陰謀外ふ泄れば敗ると理りなるかな此物語第三條に其發端を配したる堀端村の與三郎い去る天保六年の秋小次郎が爲に負傷せられ剩へ其義兄榮太郎まで限なき恥辱を蒙りたる時より小次郎が威風日を追て熾んにて近郷近在の博徒を凌ぎ麾下に就をの多かりしかば與三い心中穏かならず何時かは讎を報はんと思ひねたりし折からふ此頃府中の萬吉と上方筋より歸たる祝宴を開かんとの結搆ありと聞ければ該夜を過さず夢寄て小次郎が首級を獲んと密のに謀る面々にい小川の幸八、連雀の嘉助、八軒の榮次郎、廻田の榮太郎、平親王平五郎、いづれも一騎當千の博徒の巨魁を首として八十餘人の多勢を募り小次郎に壓されねたる多年の遺恨を晴さんと待とはまふず萬吉い江州大津の旅舍にて小次郎に別れ木曾街道を下向して此頃府中に着しかば乾兒を集めて酒宴を張んと小金井村へ來りしかど小次郎は出迎へて互ひに別後の恙なきを賀し樽の鏡をうち拔て盃盤狼籍主客とも與酣いなる黄昏ごろ小次郎が乾兒に澁柿善二といふ者ありしが此日去難き所用ありて酒宴の招

さに聽せざりしが周章しく走り來り息つき敢ず告るやう各々は未だ聞知ずや堀端村の與三兵衛が今宵夥多の黨を率ゐ六年以前小金井大哥を喧嘩に傷を附られとる復讐に進撃る手配り既に整ひぬといへど小二郎萬吉ハ此ハ唯風説なるべしとて毫も信ずる色なかりしを小次郎が兄虎之助も亦忙がはしく駈來りて與三兵衛が夜討の急を告れば初めて其事の虚説なるを知り憤然として席を立與三が如き鼠の輩ら自ら來つて虎の髭を撚らんとす愚さよ然ハあれども坐ながらに寄るを俟ハ智なきに似たり先ずる時は人を制し後れば人に制せる我より不意に襲寄て彼を撃こそ上策ならんといへば坐中も一同に然るべしと一決す時に府中の萬吉は乾兒の中を四方へ馳せ後詰の味方を聚めんとするを小貳郎ハ引止て敵の不意を襲はんとならば多勢ハ却て要なき事なり此席上に居合す者ゐて五角の勝負は充分なるべし疾々支度を調へよと迅速不思議の指揮に從ひ喧嘩の用意をする者は萬吉虎之助を首め一の宮の政次、戸倉の榮三、大丸の留吉、貳塚の八百藏、小金井竹松、歩塲井の三太、大佛の平五郎澁柿、善貳、八王子小僧金太郎、以上僅に十貳名ゐのれの得物を携へて威氣揚々と押出す時に天保十一年三月廿五日夜は亥の刻を過る頃敵ハ小川の幸八方に勢揃すと注進ありしかば小川へ向て襲出す此日ハ朝より大雨にて咫尺の間も分ち難き闇を走て一條に小川へ往んとする途に貳塚明神の祠ありり折かゝ暴雨車軸を流すが如く一歩も進み難けれは先に立たる虎之助ハ此樹の下にて一しきりの雨を避んといふに任せ一同華表の傍なる杜の木蔭に立憩ゐへば本社の内に幽かなる火影の洩て大勢の潛に集合する体なれば小貳郎大ゐ怪しみて自ら手槍を小脇にあひとみ忍びて社檀ゐ足踏かけ内の動揺を窺へば是なん敵の博徒等が屯な

しつゝ、親分の來るを待ゐありければ小次郎大に雀躍て立戻りつゝ、衆に示ずハ敵勢既ゐ此處にあれば我等も此に埋伏して彼の來るを待べしと手配するうち向ふより來るハ與三兵衛幸八に隨從したる浮浪人伊勢原の郷右衛門は渾名を今鬼玄丹といふ撃劍の達人なり其他の乾兒三十名ほど恰も隊伍を組しが如く威風堂々整々と平行に進來り兼て社内に屯する人數と合して一手になり小金井へ繰出さんと手筈を定むる其折かゝ時分ハよしと小次郎ハ鳥居の蔭より躍出天地に轟く大音あげ汝等遠く走るに及ばず小金井小次郎最前より此所に俟ことと久し首を並べて我鋒先を試みよやと呼ハりて敵の巨魁の與三兵衛ゐ突てかゝれば小川方は不意に起りし小金井の勇氣ゐ膽を拉がれ闇夜に敵の多少も知れ絲ば臆病風の立たる所へ萬吉小次郎左右より味方を促て蹙くれば烏合の博徒ハ驚死怖れて散亂するを幸八は顧みて切齒をなし穢き我黨の擧動かな敵ハ至て小勢なるゑ踏止まつて混散せと勵ます聲を柔にて闘に馳寄る虎之助が幸八覺悟と切つくれば心得たりと身を變し受つ流まつ渡合ふ此方は大將小次郎が鋭き槍を與三兵衛が拂ひ退けつゝ踏込で互ひに劣ゐぬ勇を振ひ閉てハ開く虛々實々血戰數刻に及ぶうち味方の多勢ハ是を見て共に大哥を討せまじと二個が爭ふ中に入り亂ふ戰ふ殺聲ハ天に震ふて物凄く腥血は流れて淋漓たり萬吉と虎之助ハ衆を毛、めて敵勢を中に包むで討んとすれば敵は前後を遮ゐれ心死と成て闘ふうち今鬼玄丹郷右衛門は當の敵なるゐ次郎を討て今宵の功名にせんと小次郎が横合より進て持たる槍の柄を中央よりして切断ば此時早し小次郎は持たる槍を投捨て腰にたばさむ長刀を拔手も見せず郷右衛門が左の腕に切つくれば腕ゑ遥に飛去て後にドウと倒れたゑ此勢ひゐ小川方の博徒は大い

に僻易し逃ぐるを追て多勢を繁せば遂ふ支る事能はず惣崩れとゞ成にけり却説小次郎が無二の乾兒と憑みたる一宮の政次郎二塚神社の華表際にて戰端を開きしとさより小次郎に隨ひて小川方の者どもを中に包むで擊とらんと黒白も分ぬ闇の路を其許よ此許よと馳廻り力の限り戰ふに了精神ます〳〵加りて政次が烈しき太刀風に當る者なく四五名の敵ハ一度に刃を引き脱るを追ふて大聲に汝等平素の高言にも似ず論に絶たる弱虫かゐ返せ戻せと罵りつゝ四五町ほど追やきしに遁脚速き小川の乾兒が踪跡を見失ひければ舌打鳴して立止り社前の戰ひ如何ゞと引返ぎんとそる折ふし前後ふ繁る寒竹の丈より高く伸越たる艇の間に忍び寄る敵ありとしも知らざれば烈しき數刻の戰ひに乾きし口を潤さんと大雨に濡たる袖を絞り袖の雫を吸ねたる油斷を見すまし突然に背の方より竹槍の狙ひ違ハず下腹一發突込む槍先を握りしまゝに蹌踉と倒れかゝり足ふとゞめ臭怯あ奴よ疾く出て名乘て勝負を決せずやと苦痛ながらの大音を遠く漏聞く小次郎ハ飛が如くに馳來る猛虎の如き勢ひに獸の中なる曲者ハ驚き怖れて面も出さず闇を便に立退さる跡へ來りし小次郎ハ政次が深手の体を見て切齒をあして大に怒り敵ハ遠く立去まじと小笹の中へ分入て此處よ彼處と政次が仇を索る折から萬吉ハじめ八百藏竹松金太郎も等しく此所に集りて何れも微傷は負たれども小川方ふハ重傷多く惣敗北にて一同が足も次第斗ふ脱去たりと告れど小次郎莞爾と笑み戰ひに臨むで生を思へば戰ひ必ず利なゝず古き敎へも眞なるかな我々僅に十二人にて三十餘人の敵ふ當り一時に彼を破りしハ皆一同が功にて後日の聲擧となりぬべしされども斯る小勢にて長追するハ危からん夜の明ぬ間ふ戰ひを納めて此處を引揚んと深手に倒れし一宮の政次を社檀の扉ふ乘せ之を乾兒ふ荷擔はせ小金井に立歸り各々手疵の療用をする中ふも政次ハ竹鎗にて深く突れし傷口より大腸小腸溢れ出陣兄若しむ容躰ハ者婆扁鵲が施療を受ども治すべき樣ハあらざりけり

第六回

蛟龍首を擡て翼を奮へば浮雲出流し霧雨咸く集るとかや萬吉小二郎が義に歸し名を思ふ子分の博徒近郷に在る者百四五十人前後の變事を聞傳へ小金井が家に馳集り皆親分の安否を問ふ時に與三兵衛幸八等が夥多の乾兒を引率へ再び襲寄來るとの風聞喋々たりけれバ跡の祭に駈付たる衆くの乾兒ハ雀躍して花々しく敵を引うけ一泡吹せくれんずと待構へゐる要意の騷動大かたならず聞えたかバ當時八州廻りと稱へし幕府の捕吏檜山金平同僚吉田某と謀り武州府中の驛に於て數十名の穢多を募り小金井の動靜を密かに探索さすれバ百有餘人屯集して今ふも戰鬪起ぬべき光景あるにゞなまゝひに手を下す時い毛を吹て疵を求る大害をや釀しぬべきかと只顧人數を徵收するを小金井が乾兒等は終日敵の來るを待しに風説のゝにて影だに見えねゝ力も挫け退屈し手を空しくも解散せんと思ふ折節府中まで追捕の官吏出帳ありと聞より遽に相手を換へ直地に府中へ逆寄して彼大敵に當らんとの評議區々(まち)あるにゞ小二郎大に驚き憂ひ衆を制していへるやう我々自から罪を犯して土地を騷がす而已ならず官吏に抗して捕縛を拒ば天地の間に入られざる大罪人となるべければ唯柔順に此地を立退き他鄉に難を避んと思へば汝等宜しく親睦して再會の日を待べしと諭し賺して乾兒を去しめ喧嘩に及びし輩ちのみ其近邊の山に潛みて捕吏と敵との擧動を探るに敵方

もまた捕縛を怖れて皆甲州へ落しと聞て小二郎方も袂を分ちて萬吉等ハ京師に上り虎之助等は奥州に走る此夜より小二郎は旅支度を調へて重傷を負て親成の家に潜める政次を訪ば二死一生の容躰ふて物言ふ事も適はねば頻に悔み脅ゞ撫摩ア義を重んじて小二郎が爲に果敢なく

命を殞せ汝が讐ハ日あらずして首を墓前に手向べしと誓つて政次が手を握り向時まで歎きぬ　さりとも別れて盡ぶ是非もなし尚自愛して一日も世に存へよと懇篤にいひ慰めて小金井の郷を立退き甲斐國へ走りしは天保十一年の春も稍暮なんとする頃よりして四月中旬

ゑ至るまで與三兵衛等が所在を搜ど其踪跡を得ざるうち吾身の追捕も嚴重なれば甲府にも

潛伏し難く常陸下野兩國の間を屢々經歷て五月廿日に上野なる草津の温泉に赴きて同所の旅店坂上七兵衛方に止宿し三周ばかり入湯すれども世を憚る身の上なれバ衆くの旅客と交際ず唯二三名堅固き老人客と折々に碁を圍む外て貸本を讀つ　長き夏の日を送る徒然に耐かねん追分驛に有名なる油屋といふ妓樓に登り愉快を盡して此程よりの鬱を慰免信州の善光寺ふ遊ばんと思ひけれは坂上の家を發足したるしが平垣を行も猶暑きに草津よりして追分へゆく其間い本道ならで山又山ふ連續し嶮しき路に惱めども世を忍ぶにい中々に便を得たる心地して其夜い在の農家に舍り翌日申の刻過に追分驛ふ程近き野外の茶店に憩ひつつ主人の翁が汲で出す澁茶を採て飲おから追分へ出る里程を問ば二里には遠く三里には近きほどなる途なれど此邊は總て淺間山の麓にゐるれば見渡す彊り土の焦ざる所もなく岐路もまた夥多ありて高き樹木も稀なれば栞となるべきものもなく通ひ馴たる村人さへ迷ひがちなる所なるに過る頃より甲信の境に强盜徘徊して往來旅人を劫おし惱ます事の屢々なれば官の探偵嚴重なれども今に至つて一賊も擒められたる事を聞ねば此近傍は物騷なりと云かけて老人い軒先に立出つ斜なる日影を仰ぎ客人へ今よりして何ほど路を急がるゝとも二里に餘れる雜所なれば途にて大かた日い暮なん翁が家い此處より十町ばかりの山蔭にて茅屋なれども野宿には聊勝るべきなれば枉て今宵は我家ふ泊て明日の未明に立賜へかしと懇篤に勸め留むれども小次郎は一月餘り山間に日を送りたる積鬱を制ま難く斯いへば親切なる詞を背くに似たれども我を彼許に待同行ありて今夜のうちに追分まで是非とも行ねば不都合なるに我また少しく劍道の覺ゑもあれば山賊に出會たりとも不覺へとゝじ僥倖月も明かなれば炎熱を避て夜の路を孫々行も易からんと止る景色もなかりれば翁も强ては留めかね客人是非とも行んとおれば清へて路次に意を用ひ西と南に道をとり急ぎ賜へと叮嚀に教へ諭して別る、際に日は山の端に落入て夕月早き信濃路の淺間が嶽の麓をば其許よ此許よとさぐりしが僥倖にして賊には遭ねども嶮しき路を辛うして其夜子の刻過るころ漸く宿へ出しかば追分にて有名なる油屋の門を敲きて泊につき道に迷ひし由を告て兩三名の娼妓を聘し久し振にて絃歌を聞き頃日來の鬱を拂ひしとて頻に重る玉等に前後正体おき迄に醉て臥房へ轉び入ぬ却說此街道にい近日兇賊徘徊して其禍ひを蒙る者寡なからざる趣きは前日茶店の老人が小次郎に語りし如く探偵最も嚴密ふて近隣の宿々に異体の旅人の來る時と留置て密告せよと其筋より觸あるしかバ油屋にては小次郎が深夜に來りて泊につき殊にい多分の散財する其人拵い武士ならず然とて農商にもあらず俠客博徒の風あるい此程よりして探索ある强盜にてもあらざるかと妓夫等と直地に亭主に告て交る〳〵に障子襖の間よりして覗ふに月代延て眼の光り人も射べき容貌骨格逞しげにぞ見ゐしかば正しく賊徒と誤認まち其近傍に住居する探索方の長たりし岩村田の彌五郎が宅へ走りて訴へまにゑ彌五郎は取敢ず手の者數名從へて飛が如くに馳來り舗の四方に網を張り嚴重に手配して自ゝ四人の捕手を率ひ妓夫が案内ふ連ゝれて拔足しつ、小次郎が臥ゐる座敷の屏風の外ふ潛みて擧動を窺へバ夜路に勞れーそのうへに愉快を盡して沈醉したれば鼾の音のみ罩々と覺る景色いなかりけれと上意なるぞと聲かけて込入る捕手は夜具の上より鉄々と壓重り難なく繩を懸しうへ吏員出張ある迄とて一室の內に繫置き捕手は勞を休めんとて一同二階を下たりけり小

次郎心に思ふやう偖は故郷の小金井より喧嘩ふ柔くの人を害ひ八州廻の吏員が追捕の嚴重なる中を脱れて潜み隠るゝ身なれば遁るゝに道なくして斯い縄目ふ就しならんと覺期を極めて惡びれず明るを俟てゐる所へ前夜揚さろ相方の娼妓お春は小次郎が縛められしを問慰め四邊を憚り聲をひそめ今宵貴君を縛めさるは此街道に徘徊する賊と見認めて其筋へ密かに訴へたるものなれば眞に正しき汚身なら夜明て綱を受ゝるゝとも身の履歴を明白ふ陳て縄目を脱れ賜へと眞實見ゐて告るに予小次郎い罪ある身ゆゑ自ら誤解したるに驚きて春が詞に心を安んじ首をゆげていへるやう吾い熟睡しゐたるうちふ縛発られて何故とも解らざりをが山賊と見違へられしい甚しき不幸の限りといふべきのみ賊に吾は賊ならず武州八王子驛の出生にて鶴吉といふ者なるか過ゐ頃より草津の温泉場坂上といふ旅舍に止り人湯し果て善光寺へ參詣せばやと思ひたち書の炎氣に耐かねて夜道を走り此驛の油屋といふ大樓い繁昌なりと聞及び故郷への土産に立寄しが斯く冤罪に繋がれしは却す〳〵も口惜れ此由を詳細に主人に告て面會さをよといふにお春は内所へ趣き小次郎が詞の如く亭主に告などするうちに夏の夜早く明放れ油屋よりの注進に因り本陣の主人某氏も來りて倶に小次郎を糺問する、其答速かにて聊かも怪む所なきのをゐふず殊ふ草津の坂上は此本陣の主人の爲ふい實の弟の家なれば直地に使ひを走ゝせて鶴吉といふ客人が一昨日まで逗留中の擧動を探りて照會するに其品行の正しき事本人のいふ所毫も違ひなき由を歸りし使ひの語に因て忽地に疑ひ解て樓主より鶴吉をいふ旅客に於ては怪しき行ひなき旨を其筋へ具上ふ及び小次郎は計らずも放免の身と成しのも蘇生なしさるい地にて油屋を立出つ、善光寺へ往んとしたるか更に思ひを轉じつ、京師へ上りし萬吉に面會せばやと追分の驛端より駕に乘り岩村田まで來りし頃は未の刻も過しかば喰ひ晩れたる午飯をせんとて驛の酒店に立寄り舁夫等ふも酒肴を與へ自ら數盃を傾けて大に醉を發したるとき一個の舁夫小次郎に對ひ且那い今日油屋より立賜ひしと語ゝれしが油屋にては二三日前の夜此街道にて惡業を働く賊を首尾能く縛りしとか又は賊には非ずして人違へにてありしとか喋々風聞高かりしが何れが眞か知賜てずやと問はれて莞爾とうち笑ひ其盗人と誤たれしは斯いふ吾にて突然と旅籠に縄を懸られしが相方れ春が實情よより身の潔白たる事を述べ放免されし顚末を語るを聞て舁夫等は僥倖にして小次郎が恙なかりし事を祝せば素より思慮なき小次郎ならねど酒氣充分ある與に乘じ四隣を憚る事を忘れ汝等音ふも聞知るゝめ吾は小金井小次郎として武州に名高き博徒なるか追捕の沙汰の嚴しければ此近國に隠れゐるを計らず賊と見違へて偶然縄をかけながゝ鈍くも免し放ちたる片部の探索人い盲目に等しき奴なゝずやと酒が言する不問語をきく舁夫は傍ら痛さに堪ずや有けん屢々目を以て止むれども更ふ意とする景色なく尚聲高に自負して止ば舁夫等てかうじ果則へ立し小次郎の跡に從ひ來りつ、親方大事を引出しと此酒店は油屋にて親方を縛りたる岩村田の彌五郎といふ探索方の妾宅に先剣茶代の謝辭に出た婦人い則ち妾なれば禊を隔て、一伍一什を立聞したる容子なれば彌五郎方へ密に使ひを走らせたるに相違なしさすれば此所に寛々として座るのは危ふい〳〵速く此家を立出て何れへありとも走たまへと告るを聞て小次郎は吾が失策を悔ひ驚きーが贈賂すやれし壯士なれば忽地ょ一策を設け酒店の下婢を呼よせて吾は是より善光寺

の知己へ行んと思へども在へ入ては土産物を買ふ甚だ不便なれば鰹節五本を求めよと價を渡して調へさせ行李に納免て駕を急がせ此を走る事二里餘なる岩村田と塩名田の間に駕を下させて舁夫二人に忠告の恩を謝しつゝ酒資をとらせ善光寺へ行ずして再び跡へ小戻りし甲州路へと途を轉じ脚ふ任せて走はゝ其夜ハ路ふ迷ひしと僞りたのみて農家に舍り翌日未の刻過に甲斐と信濃の境に近き落合といふ松原へ差のゝるとき向より菅笠深く面を覆ひ長脇指を佩たる旅人が行違ひさま小次郎が笠のうちをぞし覗き小金井大哥ふあらずやと聲懸られて小次郎は驚きながら見かへればヤレ久しやと言ながら冠りし笠を脱を見れば是往年小金井にて交り深き友なりし上州毛見岡の三藏とよぶ博徒の一人なりしかば互ひに別後の恙なきを祝して後ふ三藏は大哥に別れし其のちも必ず訪る筈なりをが遠路の事ゆゑ無沙汰に過たり灰に聞小ば金井にて大騒動のありしより大哥を初免大勢が遁亡しされば追捕の沙汰は嚴重なりと聞とるゆゑ安き意もなかりしか計らず此所で邂逅とるは意外に出たる忙びなるが今日は何れへ志し行るゝやと問かくれを小次郎四邊を見まはして我が小金井を立退る事は既ふ知らるゝ如くなるが尚其後をも語るべく足下の話しも聞さければ此往來にて長談せバ不慮の禍ひなきにあらず此方へ來れと街道を一丁ばかり隔りたる樹立の中の小祠の樣に二個ハ腰うちかけ小次郎は此日頃常野の間をさまよひて敗次が雛をつけ覘ひ草津の湯場より追分の油屋にて縛られし事岩村田酒店ふて廣言を吐し失策まで泄さず語りて三藏が此處に吟行ふ子細を問ば我等は義兄源太郎が雛を討んと甲州をぞして是迄來りしと過去話しを說出すは次の回を見て知るべし

第七回

中仙道高崎驛にて松田屋といふ妓樓の全盛豐花の許へしば〳〵通ふ博徒の巨魁源太郎は家業ふ似氣無心ろたての優しきうへ色白く男振よき性質にてげん歌の道をもたしなまれれば多くの客の其中ふ源太郎とのゝ淺からず互ひに思ひ想ハれて余所の客ふは務さへ怠りがちに成たるを兼て豐花が客なりし是も同所の博徒の親分三の宮の淺五郎は源太郎といふ間夫ありとも知らで歳月通ひつめ多くの金を費し、首たけ惚てゐる豐花は源太郎といひかはし夫婦氣どりでゐるとも知らぬ大哥の鼻の下の長きと乾兒とよばる、我々が鼻のひしけた話しだと語合ひゐるを障子起しに立聞したる淺五郎は燃たつ胸をおし鎭めをる事ありとも是までハ露ほども知らざりしが若源太郎が豐花の間夫に相違のなき時ハ仲間の者の笑ひ種となりて面の立がたければ閑すてふして置れぬと左にも右にも松田屋へ今夜いさりて豐花が實否を探り見ばやとて身支度しつ、同家ふ赴き常ふ變りし体もなく醉て愉快を盡す折から豐花ハ四五日前より風邪の心地にうち臥て頭痛の强さに堪がたしとて宵に座敷へ來りをのみ閨房へ入ども顏さへ出さねば淺五郎ば心の中に假令源太が間夫にもあれ是まで永く通ふうち强面かりし夜もおのりしが今宵に限りて面さへ見せぬは實に病の堪がたきものなるべしと推量し偖は乾兒の戯れ話しハ根もなき事にて有けりと思へば病氣の其中に長居をするも野暮らしと自ら恥て桃をあげ更行鐘を算れば未だ子の刻にてありしかば獨ふ、にて明ぎんより又氣を轉て近邊の割烹舗にて飲んと起出つ豐花に附て仲居を呼稻養生を大切にせよとて見まいの金など與へ松田屋の門を立出て二

十歩ばかり行むかふに是も深夜に立歸る客を送りて豐花が何やら喃々私語つ離れがたなき風情也ふゞ淺五郎は大に怪しみ偖ハ風邪に冒されて打臥ゐるとは僞言にて他のなじ染の客へ出唯我にのゝ强面かりしかと思へば妬さ腹立しさ去にても彼客ハ如何なる奴にのあらんずらんと泥酔したる体ゝもてなし足もしどろに弱矢きて彼漢に突當りさま冠りし手拭ひかなぐゝ捨る其手を捕へて彼漢が無禮の奴め何するゞと互ひゝ面を見合せて「汝ハ源太か」淺五郎かと角芽立しが男と男其場ハ笑ひに紛らして左右へ別れ立歸しが淺五郎ハ源太郎が豐花の間夫なり去事を現在見たれば怒に堪ず遂ゝ夥多の乾兒をのたゝひ或雨の夜の闇に紛れ高崎歸りの途中に待うけ不意ゝ起つて切かけしゝ源太郎も覺ある腕を揮ひて戰へども彼ハ大勢此方は單身遂に全身斷々に切れて死たる其仇を當時は誰とも知れざりしが匿すより顯ハる、はあく淺五郎が乾兒のうちにて源太郎を暗殺するとき手傷を負たる者より泄て敵は正に淺五郎なりと巷街の風說高かりければ三藏は義兄の讎やはか安穩に置可かと復讎の念頻なれども淺五郎は常に夥多の乾兒を率ゐて身を防げば迂濶には手を下し得ず怨を耐へ時を俟しに淺五郎は先頃より韮崎の馬市場へ賭博の稼に來りし由を聞知りたれば三藏と是屈竟の機會なりと淺五郎が跡を追ひ密に此地へ來れども彼が止宿る其家にハ近ごろ武州より來りし八軒の榮次といふ食客ありて彼榮次と頗る腕はへある上に乾兒も四五名同居すれば慾ひに手を出す時は却て本意を果さずして毛を吹て疵を求る大事ならんと思ふにぞ聽するにてハあらねども暫く躊躇ゐたりしが再度れもひかへすやう時ハ得難く失ひ易し假令敵ハ多勢なりとも義に一身を抛つて淺五郎と刺違へ共に死なんと意を決し又引返して淺五郎が今日しも他出の歸途をまち此邊を徘徊しゐたりとの物語の頓末を小二郎は委しく聞其馬市場の食客なる八軒の榮二といへるは去し小川の喧嘩以來甲府に隱れゐるときく義兄政次が讎ハ一個計らず居所を聞知りしこそ盲龜の浮木といふべきのみ我助太刀して榮次を殺せば足下ハ當の敵なる淺五郎を討とつて義兄の怨みを晴すべし其他ふ從ふ乾兒の奴等ゝ假令何十人ありとも更ゝ怕る、ものならじといへば三藏大きゝ喜こび大哥に此所で邂逅ーは天の與ふる助太刀ゝて共に本意を達すべき時至れりと勇みたち祠の扉れー開き心願成就と祈念しつ等しく身輕に扮裝て今宵を過さぬ復讎の用意に時を移そうち日ゝ山の端に落入て群鴉の聲喧ーき黄昏ごろ遠目に確と分らねど畔の近道つたひつ、此方へ來る五人連の先に立たる淺五郎ハ歸ゝぬ首途に花咲て勝負の運やよかりけん微醉機嫌の聲高ゝ榮次等と語合つ、畔を傳ひて歩行ゐゞに路傍の祠の内より顯れ出さる三藏が氷の如ク脇指拔もち去向の方に立塞り天地に響く聲高ゝかに三の宮の淺五郎且く駐まれ忘れハせまじ高埼の松田樓の豐花か强面かりしを遺恨とし汝が爲に暗殺されたる源太郎が讎を報ふ義弟三藏が怨の刃受て見よやとい、も果ず眞額に振翳して飛ぶが如くに走か、れば榮次を首め三人の乾兒ハ迭ゝ大哥を討せじと推隔て拔つれて戰ハんとする折しもあれ祠の後り藪陰より拋出す礫の勢ひは烏銃ゝも猶烈まく鋭ひ進む乾兒等が眼鼻の間を打破ればそわ助太刀の伏勢あるゞ油斷するゝと左右なくハ戰ひもせで躊躇ひまに篠押分て走出る小二郎ハ憤然と猛り撫つて三藏と戰ふ榮次が背の肩より助へかけて斫倒せば礫の爲に倒ぎれし殘る乾兒ハ之を見て敵し難くや思ひけん打破ゝれし疵口を押へて周章狼狽し逃足出して駈去たり小二郎は

倒れて蠢々く桑次が頭を足下ふのれ汝は我が義弟一の宮の政次を突殺したる報ひは迅く我又今日ふの數の蔭に潜みて汝を擊ち政次が怨みを晴せしあり思ひ知るやと罵つて胸元を刺貫けば呻とばかりに息絶たり有恁ほどに淺五郎ハ不意の加勢の礫ふ打れ乾兒の倒るゝ体を見て心大きに慮しされば小二郎が身を顧して桑次を討て顧ミる際なければ足場を撰りて一丁ばかり田圃の方へ退くを蓬なし返せと喚かけて三藏は驀地に追せまりつゝ討ふむ切先鋭くて當るべくもあらざれば漸々に後へ引く脚を小石に跌のし輾を獲たりと三藏が昇しかゝつて胸骨を拐も通れと貫けば淺五郎は血走る面の色赤くなり青くなり呻き苦しゝ死でけり

此景況を見注偖て新付來る小二郎ハ三藏が手錬を賞し迭に本意を遂たるを祝し喜ぶ其折から四面ふ響く竹螺の音は此地も先頃より兇賊屢々徘徊すれバ逮捕の爲とて村々に豫て備ふる人數を集る非常の合圖を吹鳴すは小次郎と三藏が此復讐の鬪爭を賊の出しと間違へて勢を以て取圍む容子に小次郎驚きて我々既に罪ゐれば擒られなば脱れ難し三十六計走るふ如ず徇線あらば再會せんと落行先を約する間もなく追手の人數の近付にゞ小次郎は三藏と暗を達へて走去しが此邊都て不知案内の所なりせば危急の場合に野路畔道嫌ひなく荆棘の中を踏越つ足にまかせて數十丁走る後邊に人馬ありてモシ小金井の若旦那待せたまへと呼掛しを誰なるらんと振向見れば此邊近き落合に住居する髮結職の和吉なり扨この和吉といふ者は壯年の頃武州所驛に在て淺之助といふ一人の悴を十一才に成しころ小次郎が父勘右衛門の許へ丁稚に遣しゝに勘右衛門は大方ならず慈愛を加へて使ひしうち和吉ハ重き病に罹り家業も出來ねど困窮して細き煙も立兼しを勘右衛門は頻ふ憐み米と金とを惠みしかば和

吉は飢渇の苦を脱かれ半年程にて平愈せしふそ勘右衛門が恩義を感じ全快の後も小金井へ屢々來りて起居を問しに淺之助は父の氣質に似ず成長するに從ひて腕立を好み賭博に耽り放埒者の萌あるにそ勘右衛門は折々に誡め懲しなどせしに淺之助は十九才のとき近村の博徒某氏と喧嘩ふ及びて相手ふ傷つけ後難を怖れてや其場よりして逃亡したるは小次郎が十二才にて父の勘氣を蒙りたる文政十二年の春なりけり此時しも勘右衛門ハ假令本人逃亡するとを我召使の者なればとて多くの金を吝まず出して示談を整へたる由を和吉ハ聞て驚き憂取物もとり敢ず小金井へ走り來り我子の不埒を詫しうへ勘右衛門が内濟金を出したるを謝しれれば勘右衛門は淺之助が犯せる罪を咎めずまて却て和吉が嗣子の逐電したるを憐み慰めまたもや金を與へたり斯て和吉は嗣子に別れ所澤にも住わびけん遂に古郷の今の地に移りて後は小金井へも久しく無沙汰に過つるが勘右衛門が沒後に及び虎之助も小次郎も博徒と成て二塚の喧嘩の後は行方知ずと仄かに聞て大に嘆き我兒の上ふ想ひ競べて旦暮心をなやましめたるに頃日近邊の噂を聞に博徒の追捕嚴重なる觸の出しに憂苦を增し虎之助と小次郎が無事を祈りて所用かた〳〵村端れある神明の社に詣て歸らんとする時に人聲四方に起り竹螺の音喧すしく捕者ありとて百姓等が東西に奔走するは若し小次郎等が身の上の大事にてハあらざる歟と思ふも虫が知らせてや胸ふ答へて日ハ昏たれど家にも戻らず其許此許と廻りて容子を見ぬたるうち髻り亂せし一個の壯夫路なき荆棘の中を踏越え走るを月の明りに見れば紛ふ方なき小次郎なれバ急がはしく呼止て我が茅屋へ伴ひ歸り妻にも斯と語りければ酒を燗め飯を焚むかしの恩に報ハんと心の限り饗應にそ小次郎漸く寐を安んじ

計らざる再會ふ危急の難を救ハれし厚き情を感謝しつ過去し事を語出し十二歳ふて父勘右衛門に勘當されし其以來同胞博徒を成果て今日檢見丘の三藏もろとを難を討たる事までの一伍四什を物語り我斯の如き重罪あれば此家に久敷く止まらば遂にハ老人夫婦まで連累ゑるに至るべ去然すれば恩を讎ふて酬ひ快よからぬ業にして丈夫の恥べき所なれば今宵の中に立去べしとハ思を和吉は押とめて此い又餘りに御短慮なり不知案内の夜道とハひ宵の騒ぎの米だ落付ねば暫く隱れゐとまへかし此街道へは先頃より盜賊多く出るゆゑ嚴しく備へて狩盡さんと長野原へ新關を搆へ往來の旅人を調べらるれば迎も通行かなひ難し去とて元へ引返すハいよ〳〵危き事なれば此背後なる山通しに樵夫の通ふ細道ありて甲府へ出る所あり翌の夜鈴が途中まで路案内して落させ申さんまづ臥たまへと休ませて其明る日ハ人目を厭ひ小二郎を奥ふかく忍ばせ和吉ハ病ひと僞はりて家業を休み家にありて過古語しも聲低く淺之助が踪跡の分り難きをうち歎けバ小二郎これを慰めて我まさ今日より國々を經歷るうちにハ淺之助の所在を聞知ることあるべしさずればかならず異見を加へ親子再會さすべきゐれバ身を大切に自愛して待たまひねと老人夫婦を懇ろに慰めて物語るうち夏の日の長きもいつか晩ければ握飯など多分に用意し和吉ハ月を便りにて山路をたどり先に立ち凡二里程もきしとき小二郎和吉を見かへりて幾里が間だ送らるゝとも名殘の盡べき期ハなきに老たる身にて山深く夜路をはしるは歸路も氣づかはしくて我とまた却て心苦しくれもへば抵て此處より戻られよと辭するを和吉ハ强かねて尙再會を契つゝ懇々として袂をわかちぬ是よりして小二郎は案内知らざる深山に分入り其夜は怪しき山神の祠に舍りて翌日ハ樵

夫の通ふ峯を辿または溪間へ深く下り桂にすがり岩を這ひ足に任せて走りつゝ又夜ふ入ば猛獣の憂ひを防ぐ其たゑに用意したりし麻繩にて己が體を幹に結ひつけ大樹の俣に足を踏かけ睡りもやゝで夜を守り明れば下りて走るほどに和吉が贈りし握飯も悉く喰盡して既ふ飢渇ふ迫ゝんとせしが岩村田の酒舗にて自ゝ罪を口外せしとき追手を避ふ當座の策と家婢ふ買せし鰹節の包の内にありしを幸ひ之を食して清水を結び僅ふ口腹を凌ぐのみなり艱難辛苦も豪邁不敵の小次郎なれバ毫も屈せず山なた山を越るほどに第四日目に漸々と甲府の街へ程近き海野口へぞ出にける

第八回

斯て小次郎ハ甲府路より道を換て江戸に出暫く潜伏しゐたゝしが追捕の沙汰の嚴密なる由を告る者の有れば一先下總なる成田山の不動へ詣て危難を避んと行德より船橋にかゝり太神宮へ參詣せしに計らず同社の境内にて而會せーは四年以前八王子の眼鏡屋といふ妓樓の抱へにお關とて全盛なりし美人ありしが小次郎は此お關に馴染を重ねた履歴を聞に生國上總の木更津にて農間に濱邊へ茶店を出す新兵衛といふ者の娘にて母が病氣の藥の代に身を賣たる由を聞て其孝心を彌々感じ遂にお關を身受して母ハ果敢なく成し後ふ父親の許へ歸らしめゝる其新兵衛にて有れバ互ひに無事を祝して悅び新兵衛に伴はれて暫く上總に足を止め同家ふ食客てはあれど娘を苦界に沈むる迄困窮したる新兵衛が世話にハならで小次郎ハ却て父子が活計を助れば娘ふ關ハ打絶し恩人ゐり情夫なれば信々しく仕ふれと小次郎は義に強き性質なれば娼妓の時こそ戯れもすれ今食客と成し身ふて慰みものにする理はあしとて遂にお關と同居せず新兵衛が往居の邊に明家を借うけ獨身にて三ヶ月ほど住ふうち此木更津の新宿に長吉と呼る博徒ありて夥多の乾兒を持たるに同處を距る事四五里にして宇を美野といふ處にも玉吉といふ博徒あり彼も是も此土地の巨魁と呼れしかば近郷の博徒ハ皆この兩人の乾兒となり迭に威勢を爭ふ程に果は吳越の思ひをあし往年鹿納山の祭禮ふ賭場を開きて喧嘩を起ゑ双方の乾兒ふは死傷の者も少なからねば巨魁長吉玉吉も捕縛せられて長吉は三宅島へ流されしが玉吉は親の代よゝ探索方を務ゑしかば奪幕時代の依估の沙汰にて無罪放免と成しかば長吉が乾兒等は偏頗なる處分を恨めゞ又詮術もなき物から勢ひ忽地に衰へて漸次〳〵ふ玉吉が下風に立者衆きが中に吉五郎といふ者は長吉が無二の乾兒なれゞ其節操を變ずる事あく君辱しめらるゝ時は臣死すの敵へは知ゝぬ鄙夫ながゝ巨魁の長吉のゝ片頗なる罪科に處せられ相手方なる玉吉は安全としてまそ〳〵威を張り勇に誇るを見るよつれ爭で長吉が遺志を襲ひて玉吉を壓倒さんと義氣を決して博徒を廢止魚賣とは成されぞも仕入ぬ生魚商ひに損のみ多くて資本を失ひ時借しゝる僅の金をれ關が出す茶店の前にて苛酷く促られたる其場ふ在し小次郎が金を償ひ取扱ひし俠氣に深く感服ゑ家に歸りて熟々と肚裏に思ふやう彼壯俠が擧動ふそ農夫商賈の類にならねば必ず名ある俠客に疑ひはあるべかゝず傳へ聞く武州多摩郡なる小金井の小次郎は義を重んじて財を惜まず弱きを助けて强を挫く豪傑なりしふ客歳不慮の大闘爭より故郷を去て踪跡知れずと人の噂に聞たりしが若小次郎ふはあらざるか如らんにては信を以て交際を厚くなし我夙念を打明して之が扶を賴なゝば之に上とす眛方はなしと意中に思案を定め新兵衛が許に到り言に假

詫訊れども新兵衛親子は深くつゝみて彼れ武州八王子ある親族の悴にて亀吉と呼る者なるが放蕩にして勘當され暫らく這地に來れるのみと答へて更に實を告ねば又小次郎が方に到て頃日の情を謝しろれより屢々訪ひ音づれ下物となるべき魚など贈りて日よ〳〵親を寄りせ湖上の話まに夫となく素性を問ども小次郎は餘所の説話ふまぎらして實を吐くことなかりければ吉五郎は只顧に靴を隔て痒を搔く心地のみして悶つゝ空しき光陰を經過しゐたり

第九回

昔なしの川とぞ遂ふ流れ出るはで物思ふ人の涙ハと詠ふし歌ハ新兵衛か娘お關の身の上に寓居人とは云者の家の活計や衣服まで世話して呉る小二郎か霖雨の徒然ふ午餐酒過し、轉寢に風邪を冒なと湖まきを持てお關ハ拔足しつ熟睡の夢を覺させまじと密と打被れパ小二郎は浮世を忍ぶ身なりせも草木の戰ぐ音にさへ心を置きて俄破と刻起ふ關を見つゝ莞爾と笑ひ此ハ憚と云ながら又眠らんとする枕邊に据りてお關ハ涙にむせび思ハず聲を立るを訝り小次郎は又居直りて此は何故に歎くやと問ば答も内性を明て言れぬ物思ひ他人行儀も程ふぞよる四年以前ふ老父と妾か厚い恩を身に受し其報謝を何處余でと思ひ悲ひし甲斐ありて詞ふず這地へ木更津の濱へ此はど碎船涙のよる〳〵身脚を摩もしたく思へども潮に黒みし磯なれ松海人か漁ろ鮑の貝の片想とは此事か傀儡の果の賤しをを厭はせ賜ふと知ては有ど寧ろ强面く苛責し飯焚婢と見傚れても恩に報ふ爲なれば吾儕等父子にハ意をれ留なさるは何故ぞ吾輩か命を捨れパとて他人ハ入ぬ門守に氣遣へばこそ彌まさをかけても

愕兀覺玉ふハ若や密に訴へて出かと思召故か左程に吾儕を疑ひながゝ憎みハあさらでなまじひに花走る衣服や頭飾類を買て下をるれ志しと嬉しいやうで悲しさふ思ハず泣たに何故と問れるだけが切ないと又泣伏ば小次郎はれ關か背を摩なから訴認するかと疑ふ程なら新兵衛殿の世話にはなゝぬ此濱邊では大漁を喜ぶをへも氣に係る網裏の魚の小次郎となまじひに緣を結ぶ、後の難儀も嘸あらんと思ば强面く挙動のみ恩とするには足ざる報ふ命をさへも捨るとある節義の詞は頼母し、お尋者を覺期ふて連添ふ氣なら又何時か再び花咲く小

慶應水滸傳

金井の故郷へ歸へる事もあゝう和主等父子か深切を露ほども疑ハぬ證據い斯と帶に手をかれて身近く引寄れば又今更に恥かしく嬉しき胸の轟きて引る、儘に解帶の長き契を結びけり其夜より吉五郎は酒と下物を携へ來りて盃の數を重ね小次郎に對ひ笑し氣に我等も雨の徒然に先刻此家へ來かゝりて庭口より入んとそるに内に婦人の泣聲あれば何事ならんと足を止め聞とはなしにれ關嬢子の愚痴か〻起つて小金井の巨魁といふ本名を聞た此方の喜びとゝ關嬢子の悦びとを兼て互ひの身祝ひょ酒と肴を提て來てゝ願ひ申す次第といふは斯々なりと座を正し其身の素性を初として長吉と玉吉か意恨の顚末より復讐の存念を包まず洩さず物語て只管に小次郎の佐を乞しかば小次郎も其義心を感じ遂に本名を明さうへ供ふ力を勵すべしと誓言を立て承諾しかば吉五郎ハ多年の願望たれりと喜ぶ事大方ならずして先の親分長吉が乾兒にて玉吉に服從はゞ彼方此方に散在しゐさる舊き友を相語て小次郎を后見と頼み初て賭場を開きしのパ衆人愕き怪しむ中に玉吉の乾兒等は或ハ驚き或は怒り親分の細張中にて奴等に賭場を開かせて阿容々々と傍觀しては親分へ言譯なければ脚も腰も利

ぬ程に驟挫で此後とも喰出しの成らぬやう懲めて呉んと示し合せ賭場暴しに來りしに小次郎が爲ふ拝へられ却て散々ふ撲懲され逃げて歸りしが猶懲ずまに味方を催し再三來れども辛き目に遇ふのみなれば吉五郎が勢ひ漸々に強く乾兒も衆く隨從しうへ長吉か舊き乾兒等も皆吉五郎に屬きたれば僅の一年餘りの中に木更津の貸元と稱るゝ迄に成たるも皆小二郎が輔佐に由れば吉五郎は小二郎ふ親分と尊敬て自ら媒酌して新兵衛が娘れ聞を勸め表立たる妾として一年餘りを玆に經過しぬ是より先に小二郎に驟懲されたる玉吉が乾兒等い小二郎を暗撃にして遺恨を晴し邪魔を拂はんと謀りし事さへ齟齬ければ只顧こ憂ひ悶へ額を集めて商議するに彼八王子の龜吉といふは必ずしも假の名にて然るべき本名ある奴なんと種々に手を廻して探索するふ尋者の小二郎なりといふ事の泄聞へければ玉吉等は大きに喜び斯る証據を得しうへ今宵を過さず大勢にて小二郎が家に押入り縛りあげて我々が宿意を散ずるのみならず褒美の沙汰に預からんと村境の辻堂ふて玉吉の乾兒等が手筈を示し合する折から闇い毎も此地藏尊ふ小次郎が身の上の無事息才を祈りつゝ今日も來りて祈念の間に降來りさる遮雨を避て堂の内ふ憩ひ此者共が談合を逐一聞て大きに驚き走り歸つて今宵に迫る小次郎が身の危急を語れば小次郎は新兵衛に急がいしく別れを告俄に支度を整へて親子が望に從がひつれ闇を伴ひ木更津より船に乘じて相州浦賀へ走しが此港に有名なる楽山の金太郎といへる博徒い性質家邁俠氣ふして廣く博徒と交際すれば虎之助小次郎とも年來交深き故小次郎は上總を脱し金太郎の許を憑みしに毫も辭するところなく待遇最も厚かりしかば小次郎喜び意を休んじて暫く爰ふ寓居しつ密に故郷へ書を送り

兄虎之助に斯と告れば小次郎が舊の乾兒坂戸の丹次といへるもの忍び來つて小次郎に會し別後の恙なきを祝し且はふやう先年二塚の喧嘩より京地へ走つて追捕を逃れし府中の萬吉巨魁も此七八日先のほど密かふ歸鄉されたりと語るを聞て小次郎はさあらぬだに慕ハる、故鄉へ大哥万吉が立戻りしを大に喜び頻りに追慕の情に堪ず妾れ闘を金太郎に托し丹次と共に小金井へ忍びて行んとのたまければ金太郎は之を禁め舊友を思ふの情はさる事ながら自ら臨むで潮氷を踏み密に故鄉へ立戻るは凶多くして吉寡く万一過ちある時は志慮あさ者と笑はるべければ今しばしのわど我家ふ忍びてあれと諫めしかど小次郎遂に聽ずして丹次と共に夜に乘じ小金井へ立かへり母と兄とに面會すれば母は頻ふ喜べど官の聞えを憚りて別室のうちに身を潛ませ親しく家に立入る者にも秘して面會させざりしとぞ却説く府中の万吉ハ二塚の一件より追捕を避て京師に赴きそれより諸國を經歷し今年密に故鄉へ立かへりしが万吉の家は名に負ふ富豪なれば万吉が父は財を吝まず我子の罪を贖はんと八州廻りの探索方に巨額の賄賂を贈しにぞ之が爲ふ追捕の沙汰も大ふ寛ミたりしのば萬吉ハ氣緩み意驕りて畏る、色なく近鄉を徘徊せしかば捕獲の官吏は職掌の弛忽なるを大に覺り遽に四方へ手配して漸々に立戻り居さる衆くの博徒を狩擒るとき萬吉も府中驛の角吉といふ料理屋の二階ふ醉て眠りゐたる油斷を覘ひて召捕たと此日小次郎ハ家に在て斯と聞より大ふ悔み万吉に面會せんと一日三秋の思ひにて俟ゐたりしに豈計らんや捕縛に就しとハふ噂を偶々故鄉へ歸りゐから聞ては暫時も默止がたしと性來猛勇激烈の氣象と自ら制する能はず万吉を奪ひかへさんと二塚の喧嘩ふも携へ出て手なれたる短槍採て引扱中を飛で府中の宿へ至ふ

んとする途中にて行あひたる乾兒の話しに万吉ハ既に縛せられ四輪にのせふれて捕吏および探索方數十名にて前後を圍み路次の狼籍を防ぐに備へ整々として正里の家へ唯今送られたりと聞て小次郎拳を握りさる嚴重の備へありてば單身にては及び難たしと只管に嘆息し遂に途より引かへして究竟の乾兒十二名を集め程近き山の洞穴に埋伏ま護送の路にて奪ハんと計れる由を捕亡方に密告する者ありけれて這ハ容易ならぬ大事ありとて探索方を四方に馳せ小次郎等を索むれども山深く蹤て踪蹟を知ふざれば如何にして之を獲んと商議區々なる中に心利たる者のいふやう實に小金井小次郎ハ出沒不思議の曲者あれば尋常の力業にては容易に縛につくべからず幸ひにして召捕たる万吉を囮にして出口〳〵へ網を張置き召とる工夫は云々と其手配を整へて四人万吉を戸へ送らず正里の家に止置ば小次郎もまと此地を去ず穴居して間諜を市中ふ出し正里の家の動靜を探索するに非常の警備嚴重ふて寸毫の隙をも得ざりければ頼みし兒乾ハ爲す事もなく數日間の穴居に倦み怠惰の色を顯しければ小次郎は事の成ざるを曉り各々旅費若干を與へ勞を謝して他鄉へ去し免獨り田無の友二郎といふ無二の兒乾を伴ひて或夜大風雨の暗きに乘じ村長の家に忍び人しが警備漸く怠りて進退の自由を得たれば雨戸を外より捻明て其許か這許かと搜しつゝ深入すれば庫前の土間に四輪のあるを見て小次郎早く走り寄戸を破つて出さんとすれば豈計らんや此内に萬吉はあらずして重みに石を積入たる空輪なれば傍らに守護する者もなかりしかば這はこれ捕吏の計策ふて万吉ハ疾にに戸へ送り當地へ留置く体にもてなし小次郎を鉤寄る爲なりなれば小次郎ハ其計畧に陷りしと疾くも曉りて出んとそれば外の方俄に騒かゝく早拍子木

鳴すと等しく四方一度に合圍を傳へて家の廻りに伏置たる探索方數名馳寄て二個をなかに
ふつとり込縄をかけんと鋒めくを小次郎友五郎ハ一生懸命の勇を振ひ當るにまかせて薙倒
し一方の圍みを破つて漸く虎口を遁れけれども尚追捕の沙汰嚴重なれども其踪蹟をしらざり
れり小次郎ハ性來義氣つよく交際信實なるを以て到る處潛伏するふ便あれば官吏は百方手
を盡せど出沒自在の術ある如く住所を索め得ざる間に光陰早く押移り翌天保十四年三月萬
吉ハ三宅島へ流罪と決したる事を小次郎は浦賀に在て聞知れれも友五郎へいへるやう我は
義兄に會んとて偶々故郷に歸りしが折から万吉は縛せられて今に面語の時を得ず然るに今
より流人とならバ再會の期も量り難し依て一度面會して多年の情を陳しうへ再び木更津港
に到り鹿納山の玉吉が賭場に赴き我身の素性を密告したる怨を晴して呉んと思へバ汝と是
より郷里に歸り兄虎之助に由を語りて其身の然付を計ふべしとて友五郎に別れ單身にして
江戸へ來り流罪の囚徒が出船を聞に三月廿三日とあれば指折筭へて待ゐたるに八州廻りの
探索方ハ數度の圍を脫れさる小次郎あれば万吉が遠流の日にハ必ず來つて別れを告べけれ
ば是ぞ捕獲の好機會と八方に手配し小次郎を待構へゐると報知する者ありければ義兄に別
を告るべき便宜を得ざるふ當惑せしが屹度案思を廻らせば其ころ深川佐賀町に孫九郎とい
ふものと柏川町に閻魔藤兵衛といふ者ハ猿彦社會にあらざれども俠任を以て世に知られ乾
兒も衆く隨從して近古の幡隨院長兵衛金招牌の甚九郎にもをさ〳〵讓らぬ者なりと都鄙に
留名聳きければ小次郎ハ此人々に一面識もあけれども彼が義心を知るを以て密に孫九郎が
宅にいたり其身の履歷はいふも更なり義兄萬吉が遠流の一條を告海上護衛の吏員ふつき航

海の途中に於て面會したき由を乞ふ折から閻魔藤兵衛も幸ひに其席ふ居合せ小次郎が危險
を聞し針の筵を踏ながら遠く來つて萬吉に會んと思ふ義氣を賞し窮鳥懷に入るときは獵夫
も之をとらずと言ば我々もまた義の爲ふ身を拋つて力を盡し必ず萬吉に會せんと諾き乾兒
の家ふ小次郎を陰に養ひ置せたり凡流人護送の役は舊幕のころ船手組の一大任なれば生涯
のうち唯一度輪番を以て勤るといふ此御船手と稱する者は尚今日の水夫に等しく放蕩にし
て俠氣を旨ともるを以て品川深川あんやの遊里ハ御船手組を怕るゝと蘇民將來の如くなる
にぞ孫九郎藤兵衛ハ海岸近に住居して船手の者に知已多ければ小次郎が事を吏員に語り海
上にて送別の都合を計るに吏員らも孫九郎藤兵衛が面に對し且小次郎が義氣を憐み速かに
承諾し陸路遙に漕はなれし沖中にて面會さすれば小次郎ハ大ふ喜び久し振にて万吉と別後
の事を語合ひまた今日の再會は孫九郎藤兵衛が信義と御船手方の情に因る一伍四什を詳明
ふ告げ尚再會ハ計られねば能く自愛して長生し大赦の期を待たまへとて懷中より財布の儘
に若干金を取出し此ハ些少のものなれども時に執ての子母錢とも親して大哥へ贈にと渡せ
ば万吉手に受て両眼に涙をうかめ今にはじめぬ足下の心切我は是より配所ふ至り生死もは
かり難ければ足下は如何か手を廻し罪を免れて郷里に歸り是まで世話せし我が乾兒を指揮
して呉よと物語る時刻に問も波の上いつ迄斯てあるべきと錨を拔て右左わかれて船を漕戻
し再び上陸なさんとすれば孫九郎藤兵衛は小次郎を禁めていふやう陸路ハ追捕の手配の嚴
重なるにうか〳〵と上陸するハ甚だ危し唯この儘ふ何方へなりとも身を寄ふれよとあり未
かば小二郎彌々厚意を謝まて又途中より漕かへし再び浦賀へ立歸りし頃よりふ關ハ病に係

りければ兄虎之助の許へ送りて養生の事を頼み四月の上旬浦賀を立て又木更津へ赴きける

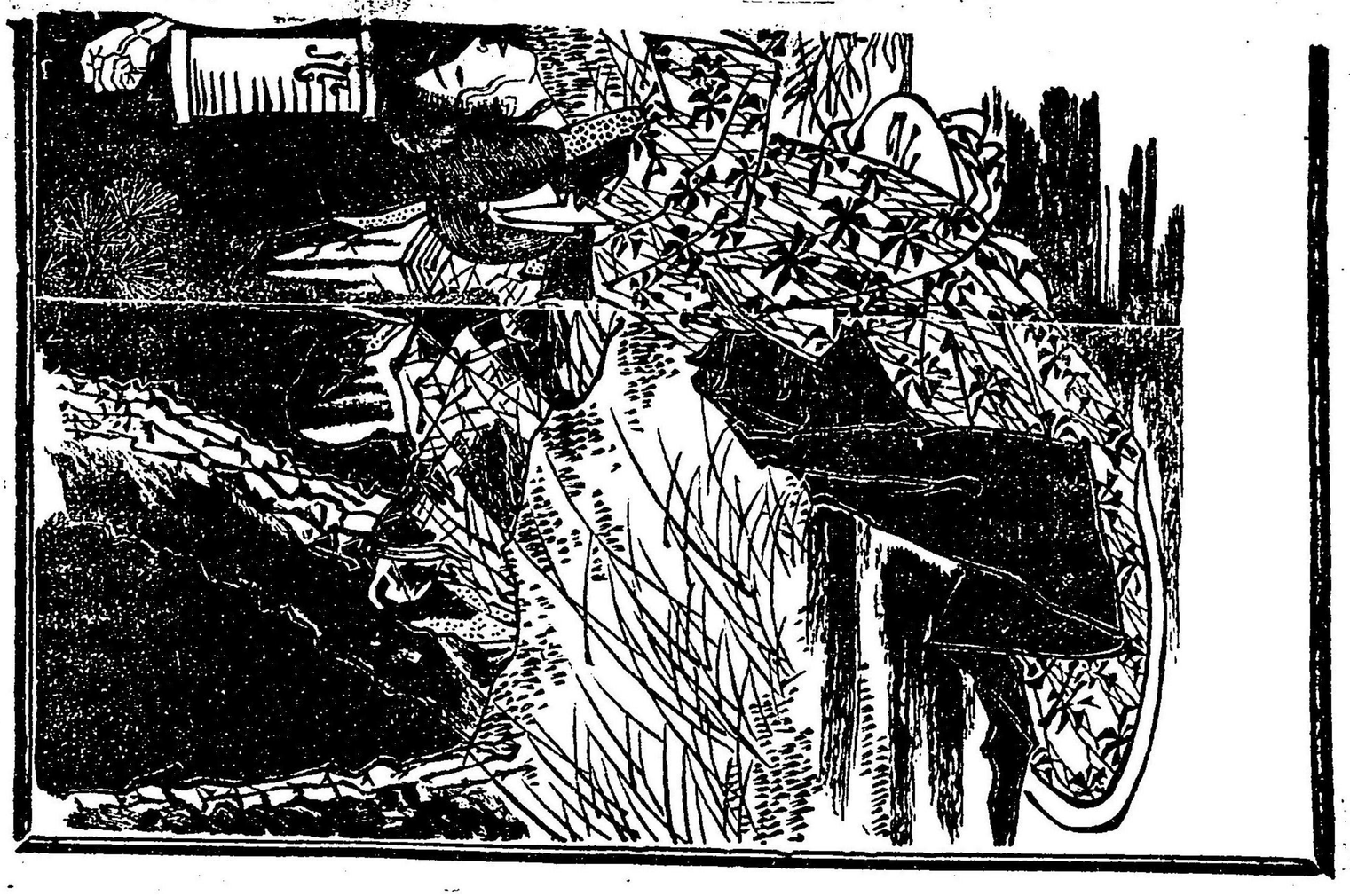
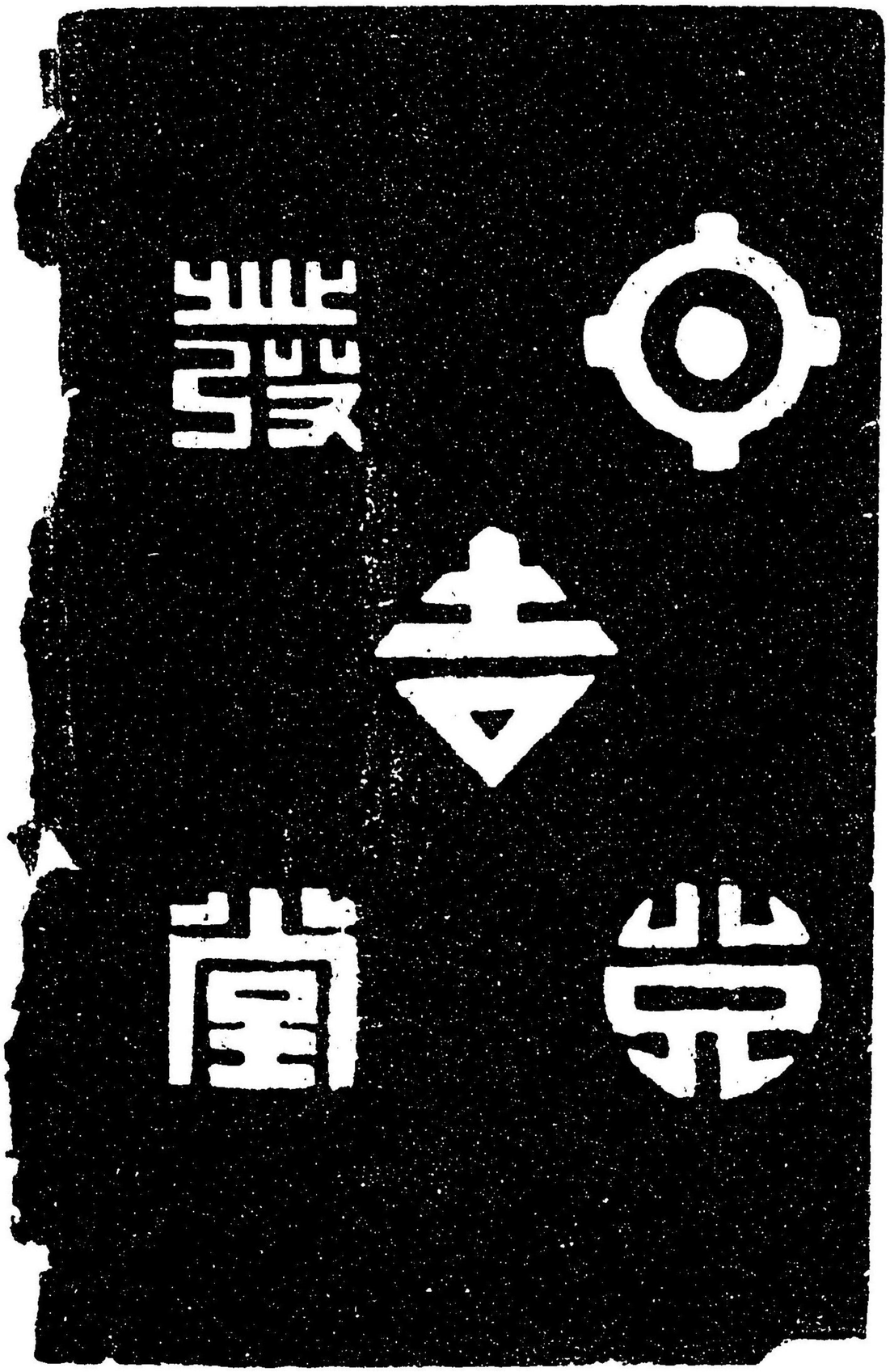
第十回

小次郎へ再び上總に至り吉五郎が家ふ隠れゐたりまに此吉五郎が弟の五郎三は同所の探索方與吉が娘ふ角と深き私情あるより色に溺れて義を忘れ兄吉五郎が小次郎を庇蔭置く趣きを與吉に明して狗とあり小次郎を捕縛させ褒賞に預りてゐ角が婿にならんと計り兄吉五郎が留守に來りて小次郎を誘引出し圍碁の友なる網主の健吉が家に連行き碁ふ打入てゐる隙に五郎三へ小次郎が脇指を持て立退き戸口へ出て合圖をすれど夥多の捕手へ前後より動也々々と亂入て矢庭ふ組付倒さんとすれば小次郎へ五郎三に賣れたるよと早くも曉り多勢を相手に柔術の手煉を盡して挑めども寡は衆に敵し難く遂に縄目にかゝりければ捕吏へ尚も罵詈の聲ひ來りて奪かへさんかと手脚にへ枷を用ひ囚轎に乘て駈去しを吉五郎は夢にも知ねば旦より出て所用を果し實昏ごろに歸り來る途中ふおいて五郎三が密訴の爲ふ小次郎へ縛に就たる由を聞き飛が如くに馳歸りしが時過されば詮方もなく茫然として考へゐたるが兼て弟の五郎三が怪しき舉動に心づきければ其罪を責て終に五郎三が首を刎衆くの乾兒を語らひて小次郎を救ひ出さんと計りしかど護衛の嚴重なるをもて汪濶ふ事を擧難ければ暫く時節を待んとて妻もろ共に江戸に出遠州に在る親類を心ざして上りける却て說小次郎へ幕政の頃の慣習として罪の當りを取と稱し囚轎にかき乘られ諸方を護送されさる末に秋も八月中旬過故郷を二里隔たる武州府中驛に留められ口供を定めゐ戸表へ送らんとする紀問に派出の吏員青山新十郎へ本陣に到着して四隣の守衛を嚴重にを頓て囚徒小次郎を引出

させて粛々と面を見つ、眉を顰め駭く愛況に小次郎も官吏を見れば何とをく相識る者の如くなれど誰とも思ひ出せねば首を垂て默ゐたり其とき青山新十郎とやれれ小次郎其方は先年故郷を去てより云々の所ふて斯々の所行ありやと問糺ども小次郎へ賭博ふ法を犯すの外は何等の覺えもゆはずと陳述すれば青山へ左もこそと詞を柔らげ寇に然らば輕罪なりと小次郎が陳る所に從はんとしたりしを同席に列りたる此地の正里星野といふは曩に小次郎に擊れたる八軒の榮次が妹を妾としたる縁に因て小次郎を嚴科に處し榮次が爲ふ讎を報ひ妾の機嫌をとらんと計る小人なれば射張出て小次郎が罪の確証をあげ針ほど糾き事までも棒ほど太く詞を飾り青山に辨明する討論果しなき間に秋の日の晩やすく日光西に傾きければ小次郎服罪せざれども其日の糺問は果たりしが既にろの夜も更過て月皎々とをし入る庭の軒端に囚轎を据置れたる小次郎は手脚に枷を懸られて動かれぬ身に秋を知る冷たき風の肌寒くいも眠られねば蟋蟀の啼音ふ耳を澄しつゝ過去行末熟々と思廻せば邂逅に故郷の土は踏なから母と兄との安否をも問ふ事離き縛めの縄は切ても斷かぬる恩愛の情に身を責ゝれのこち面なる月影を振仰向てながめつゝ歎息の外なのりけり斯る折しも怪しむべし四邊にすだく虫の音の一度に止しは何故ぞと不斗心づきて顧みれば月影暗き樹の下ふ頭巾まぶかに面をつゝみ一個の武夫一個の從者に案内をさせて小次郎が囚轎の前に近づくにぞ瞳を定めて之を見れば豈計らんや當家の主人が我庭ながら密々と忍ぶ体ふて點頭あへば彼武夫へ頭巾をとり囚轎の前に來りて恩人別後恙なきやと慇懃に詞を懸れば驚きながら誰なるぞと視れば先刻小次郎を糺問なしたる吏員なるにぞ生す〳〵疑ひ惑へるを彼吏員と聲を低

免恩人ハ吾輩を既に見忘れたまひしや吾ハ先年東海道藤嶺を過るとき親子夫婦が飢渇に迫り殆ど道路に倒るゝまで困難したりし折からに貴殿が大和巡りの戻に厚く恵みを蒙りて親子は路命を保ちたる浪士にてゐなりとありければ小次郎漸く心づき我も先刻紀問の場に曳れし其折に誰やらに似て在すると思ひぬたるが寔に然るを祝しければ新十郎又いへるやう其時貴殿に恵まれし金子を以て衣服を調へ江戸に到りて親戚に依り身の罪を父に詫しに老病危篤の際なれば免されて家に入るが幾程をなく父は黄泉の客となりふき故に吾輩家督や嗣て遂に父の職を襲ひ今日に至りしは皆これ貴殿の賜ものあれば其高恩を忘る時たく報謝の事を思へども姓名住所も告たまハねば其踪蹟を知るよしあきを平生に遺憾とーたりしに今日の再會に豈思はんや恩人ハ有名の侠客小次郎殿と初めて知て駭歎し公道を私に枉るふハ為らねども命に換ても信義を盡し前日の恩に酬んとすれど其傍らに妨げありて白地にハ救ひ難きを此東屋の主人ハ則ち吾が腹心の者なれば事の機密をうち明し貴殿の命を助る術を密に示しやさんとて夜間の夢を驚かし參らせたりと従容に意中を盡して語げれば當家の主人も傍らより巨魁意を勞したまふ宵山様が前日の恩に報ふと仰しやるのらは命のところは僕が石に判をて受合ふべし夫ゝ付ても星野めが八軒の桑次ハ内緒あれど証據を擧て彼是と拒むを強ても爭へねば晝の吟味を中途に果し今夜御身に逢ふたうへ翌日の手筈を示をんと忍んで供をして來たりといへば齊山語を次て恩人吾がいふ言を聽て明日の紀問にハ吾が問ふ儘に聊かも爭ひ拒まず速かゝ白狀して服罪せられよ是吾輩が恩人を救ふ秘密の策略なれば必ず疑ひたまふなと縡詳細に述るに予

小次郎は只管に新十郎が恩義を感じ左にも右にも明日は仰ふ任せて答ふべれれば然べく計らはせ賜へかしと謝するに予新十郎は默頭て然らんゝは一命を救ふハ意易けれど流罪は脫れ難のるべし大赦の期を待までは暫く歸らぬ故郷の餘波も今宵ばかりなれば御身ゝ會する者こそあれと暗き木蔭へ手をあげて招く芒の繁茂中より叫と一聲泣く口を袖に覆ふて立出る小二郎が母は長き病に痩細りたるれ闘の手をとり四橋の左右へとりそかり今更何と岩間洩る苦の清水のろれならで瀧なす涙禁免あへぬ母子夫婦が恩愛に身を責らる、小二郎ハ面なげに首をあげ幼稚き時より血氣にてやり動ともすれば事を惹出を母ハに苦勞をかけたる不孝ハ千悔すれども購ふに道あかりしを天の網にかゝる姿を見せ參ゝすは恐入たる事なりと後ハ涙ふかき昏て差俯向てゐる面を母ハ熟々覗きゝみ万吉殿が捕縛たと聞て汝が家を出てより何處ふ如何してゐやるやら片時忘るゝ隙もなく無事で上總ふゐるといふ音信を聞て顔見ねば安き意もなかりしに此ゝ闘をば頼むとて預けられたは又更ふ危ハ場所へ臨むかも一層苦勞を増たりと云をゝ闘が語を嗣で貴郎が上總の木更津へ酬讐に往その爲に小金井と一へ預れゝれ寶の北堂の手許に事はる、のは嬉しけれど身の結局が案事られ如何ぞ怪我のないやうにと旦晩祈る神佛に此身の命を縮めても良夫に恙ないやうと無理の願ひも叶ふ驗か當春からの大病ふ覽の通り痩衰へ北堂の厚き看病を受て無事なほ顔を見むと樂ミふ待甲斐も繩目ばかりか此様に手枷足枷ゝ夜の夢なゝ疾く覺よかしと咄口説つゝ盛り寄縋つかんとする妻も憐む良夫も母親も一つ圓居はしなかゝに手出しもなゝぬ囚人の縛に隔たる悲しミは余所の見る目も憫然なり新十郎



は小次郎が母とお關を慰めて婦人等深く歎きさまふな我皆恩に報ふ爲に經て罪を輕きに處せば放免の沙汰遠からまじ尽ぬ名殘へ察すれど此所に長居する時へ人目の關も憚りあれば能く自愛して再會の期を俟れよと促すにぞ兩婦は力なく〳〵も起んとしてへ立兼て跡に心へ囚轎を見のへり〳〵出行けり其翌日正午過る頃より小次郎を旅館の庭ふ引据青山は星野と共に一層嚴しく訊問さるゝに小次郎へ前夜約束せし如く忽地罪に服しければ其日の糺問早く終りてお〳〵旅宿に歸りし其夜青山へ星野を招きて我へ武州鳩が谷まて至急の公務あるにより明日小次郎が口供に拇印さするを見屆て出立せんと思へども今朝より遽の冷氣に同され頭痛の强さふ堪がたければ翌日の出張覺束なし故に近ごろ迷惑あから足下を代理に勞をんとす諾はるゝや否やと問に星野は既に今朝より小次郎が罪を白狀せしを其座ふ列り聽れば復讐成れりと意を安んぜ鳩が谷へもく事を拒ず要用を逐一聞て其翌日の未明に星を頂き出立せり斯て新十郎は又此日に小次郎を引出させ一通の口供を取出し之に拇印をせよとある其文を讀あぐるを聞ば昨日訊問せられし儘に白狀したる重大の事件は大かた削除き唯賭博をもて近國を經歷したる廉のみあれば小次郎大ふ驚きて意の中に青山が深況情を汲て知る涙ふ袖を濡へて吾が姓名の下に墨れば新十郎は其口供を添へ即日ふ小次郎をゐ戸表へ護送させ其身も星野が歸村を俟で直地ふ發足したりしを星野は恁とも知らざれば鳩が谷に到りて事務を便じ其翌日の夕暮ふ歸來りて青山に面會せんとしられども既ふ出立せしあとなれば小次郎が口供拇印の容子如何と人ふ問ふふ其明文は云々なりと語るを聞て大ふ憤り切齒をすれども詮力なく新十郎が舊恩に酬る由を知らざれば賄賂の行へる、故